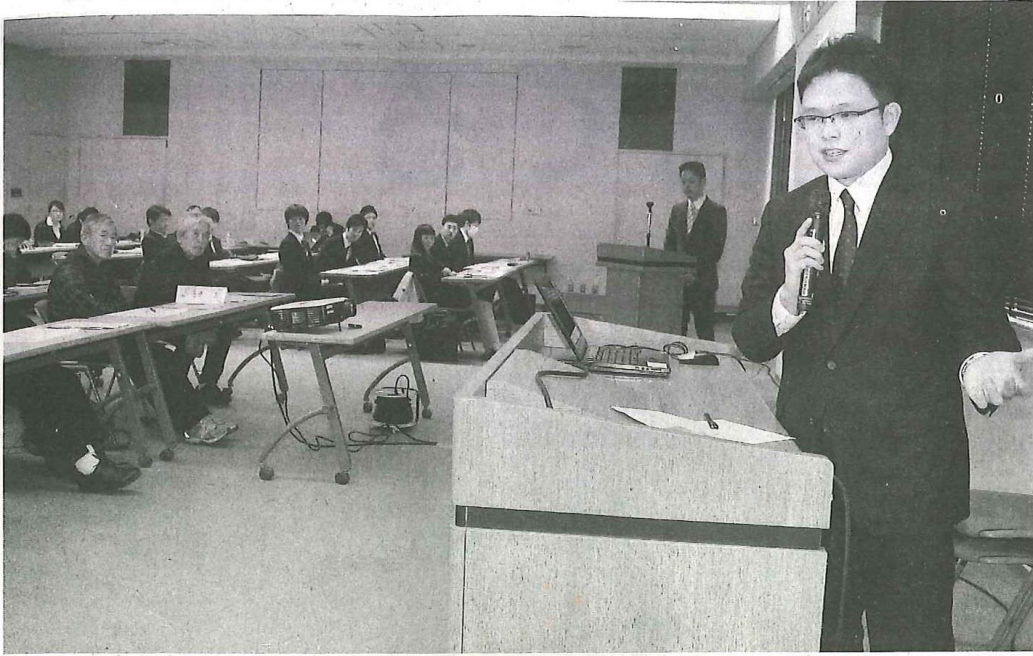


都筑区の課題 卒業研究に

東京都市大 提案、区民に発表、採用も

東京都市大学横浜キャンパス（横浜市都筑区）の学生が都筑区から提示された政策課題をテーマに卒業研究を行う「地域連携調査研究」が、2003年以来続けられている。区は「若い人の発想と知力を行政に借りたい」と話し、研究結果が街づくりや行政施策に反映される例も出ている。（長原敏夫）



都筑区に関する卒業研究を発表する東京都市大学の学生（2月25日、都筑区総合庁舎で）



「センター地区は街の魅力度の評価は高いが、商業機能の評価は低い。魅力的なテナントの誘致やベビーカーで買い物ができる環境整備が必要と思われま

す」。2月25日に都筑区総合庁舎で開かれた地域連携調査研究発表会。港北ニュータウンの商業地の中核である横浜市営地下鉄のセンター北駅、センター南駅（ともに都筑区）周辺の買い物客の行動や意識調査を行った同大環境情報学部4年の川瀬浩子さん（22）ら学生4人のやや辛口の研究発表に、区役所職員や区民約50人が耳を傾けた。

この日は、同学部17人の4年生が、街づくりや環境保全、高齢者支援など10の研究を発表した。

港北ニュータウンの渋滞緩和策をテーマとした藤本

雅大さん（22）は、区が調べた車の出入りに関するデータや自ら商業施設駐車場などで行ったアンケート調査を基に、「道路の中央分離帯を廃止して車道を広げ、追い越しを可能とすることでうか。提携駐車場の活用も必要」と提言した。

会場の区民からは「たまプラーザ（横浜市青葉区）も巨大になり、武蔵小杉（川崎市中原区）もすごい。センター北、南は地盤沈下しているのではないかと危機感を訴える質問も出て、適度の緊張感に包まれた。

地域連携調査研究では区と大学が年2回、意見交換会を開き、区が行政課題を大学側に提示している。学生は課題の中に興味を感じるものがあれば卒業研究テーマとし、区は研究に必要な状況説明やデータ提供を行っている。

卒業研究のテーマは区政にこだわる必要はないが、毎年、一定数の学生が区政問題を取り上げている。

その結果、区の統計資料のデジタル化や区民や行政が持っている昔の写真の二次利用法の提案など、学生の研究結果を区が採用した例も出ている。歩道のな

り、歩行空間をアピールしている横浜市の「あんしんカラーベルト」は、市の委託を受けた同大の学生の観察調査で効果が確認され全市に広がった。

同大の吉崎真司環境学部長は「学生には、自分たちの研究が社会に役立つものなのだ」と分かったうえで、卒業していったほしい」と語る。

藤本さんは「区のデータをもったり、商業施設の中で調査することは、学生ではそうはできない。いい経験になった」と振り返る。卒業後は建設コンサルタント会社に就職が決まっており、道路計画などで街づくりにかかわっていくという。

●この記事・写真等は読売新聞東京本社の許諾を得て転載しています。無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。